

# 学級活動

学級や学校の生活づくり

指定校番号	28017	学級活動	○	児童会・生徒会活動	学校行事	別紙様式
-------	-------	------	---	-----------	------	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島市立己斐小学校	校長	竹川 智子	生徒指導主事	吉實 亮
-----	-----------	----	-------	--------	------

取組事例名 『スマイルタイムで学級力向上』

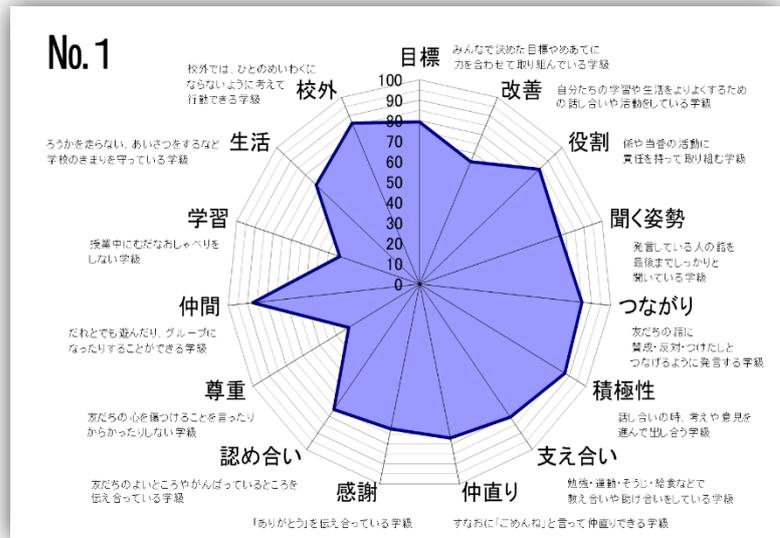
取組のねらい『学級力向上』

学級力・学年力向上のために、「スマイルタイム」をもつことや「スマイルミーティング」の取組をすることにより、自治的・主体的に学級の課題を話し合い、解決していこうとする意欲や力を育てる。

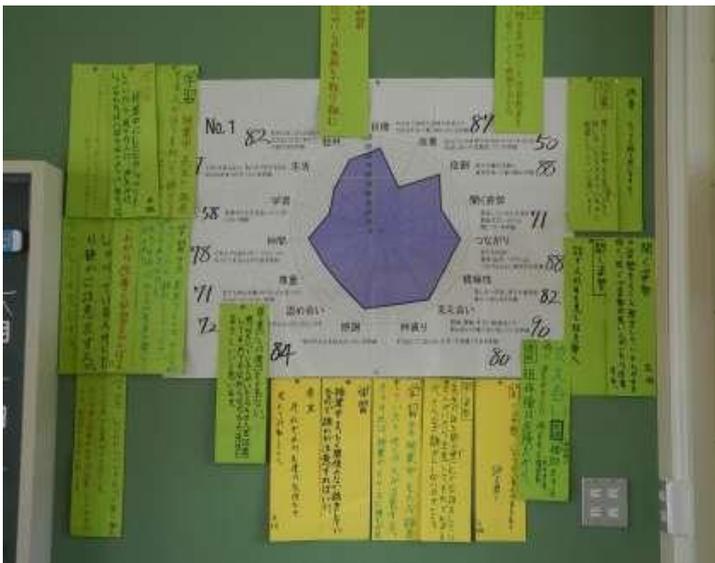
取組の具体的内容 『スマイルタイム』

右図（レーダーチャート）は、児童一人一人が自分達の学級をアンケートによって評価したもので、アンケートの結果を入力すれば、目標・改善・役割・聞く姿勢・・・等、全部で15の観点別に分けて、グラフ化されている。

己斐小学校では、このスマイルタイム（学級力を高めるための一連の活動）を実施し、レーダーチャートをもとに、学級の強みや弱みを客観的にとらえることができている。



取組の課題・創意工夫 『スマイルミーティング』



7月までに2回以上実施した学級も多く、各学級で自らの課題を共有して具体的な解決方法を考え、学級の取組として掲示したり振り返ったりしている。

左写真はレーダーチャート発表後に、学級会（スマイルミーティング）をもち、自分たちの弱い項目の原因について考え、その対策について話し合い、短冊にまとめて掲示したものである。例えば、学習面が低い（私語が多いと感じている）学級は、声を掛け合うといった意識面だけにとどまらず、自らペナルティを科したりポイント制にしたりと、工夫

しながら学級力の向上を目指している。

課題は、アンケート記載時、直前の活動内容や教員の声かけがレーダーチャートの結果に影響を及ぼすことも多く、客観的なデータがとりにくい点があげられる。

## 取組の成果（効果）『自治的・主体的』

児童は数年前から、スマイルタイムを定期的に行っており、児童の学級力に対する意識は高い。前回と比べながら、「今回は野外活動でがんばったから、『つながり』があがったね!」「まだ、〇〇って言っている人がいるから『尊重』が低いまだ!」と学級会で積極的に意見を言う児童が増えてきた。

学校評価アンケートの「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことはありますか。」という項目では87%の児童が肯定的な回答をしている。また、学級に問題が起こると、まず自分たちの力で解決しようといった気持ちが芽生えており、効果が上がってきている。

## 今後の展開『サイクル』

年間を通して考えると、特に後期はドッジボール大会や長縄大会、学習発表会等、学級が協力して取り組む行事が多い。行事の前や後に効果的に学級力アンケートを実施し、子ども自らが学級の実態に目を向けて課題を見付けさせ、子どもたちが自治的・主体的に課題解決ができるようにさせる。また、学級力アンケート実施後に、必ず「スマイルミーティング」をもち、課題を確認し、課題解決のための具体的な取組を実施する。(具体的な取組は、意識できるように掲示しておく。)そして、その取組を自分たちで評価していくサイクルを繰り返して、学級力を高めていく。形式的にならないようにするための手立てとして、例えば、はがき新聞を活用して、個人の振り返りを書かせるような取組を行うようにする。



## 他校へのアドバイス『見える化』

学級力向上プロジェクトは、早稲田大学教職大学院の田中教授が研究されている新しい学級経営の手法である。(書籍化されており、第2巻には己斐小学校の取組も掲載されている)今まで、漠然と「落ち着いたクラス」「荒れているクラス」と表現していたものが、数値化することにより、児童だけではなく教員側からも、担当している学級の長所・短所を可視化することができる。

また何より、児童が主体的に関わる事により、学級の問題を自律的に改善することができ、いじめ防止等に繋がるのではないかと考え、取組を継続している。



指定校番号	28040	学級活動	○	児童会・生徒会活動		学校行事		別紙様式
-------	-------	------	---	-----------	--	------	--	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	呉市立阿賀小学校	校長	山下 伸一	生徒指導主事	堀江 大志
-----	----------	----	-------	--------	-------

**取組事例名 『クラスチャレンジ』**

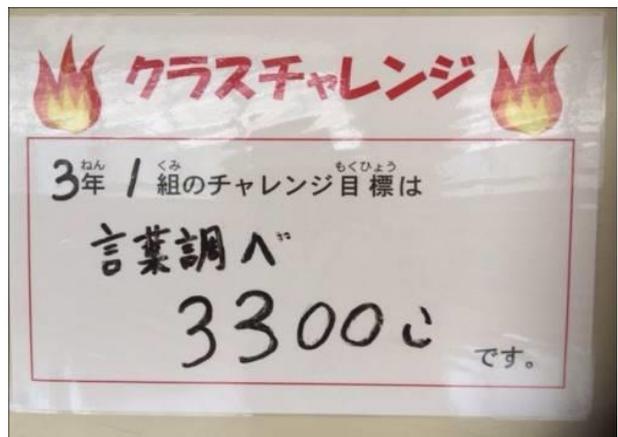
**取組のねらい『キーワード：望ましい行動を増やす』**

- ア 学級全体が一つの目標に向かって努力することで、学級内での適切な行動を増やし、いじめ等の問題行動を減らしていく。
- イ 一人では達成できない目標を、他者と協力しながら学級全体で達成していく経験を通して、児童相互の絆を深める場とする。

**取組の具体的内容『キーワード：学校全体で取り組む』**

- 1 取組の流れ
- ① 学年・学級の良さ、課題などについて学年または学級で話し合い、学級をこれまで以上に高めていくための「チャレンジ目標」（取組期間等も含めて）を設定する。「チャレンジ目標」については、教室入り口に掲示する。（用紙は生徒指導部が準備）
  - ② 達成した場合の褒賞について担任が学級に伝える。
  - ③ 「チャレンジ目標」を達成するための取組を行う。
  - ④ 帰りの会や掲示物、校内放送を活用し、進捗状況を児童にフィードバックする。
  - ⑤ 取組最終日、結果について学級全体で共有する。
  - ⑥ 達成した場合、学級へ褒賞を与える。そうでない場合は、要因について話し合い、再度チャレンジさせる。

- 2 目標について
- ア チャレンジ目標を達成することで、学級が高まるような目標
  - イ 実現可能性のある目標
  - ウ 達成したことが、だれであっても明確に分かるような具体的な目標（数値目標が望ましい）
  - エ 学級の児童全員に活躍の場が与えられるような目標

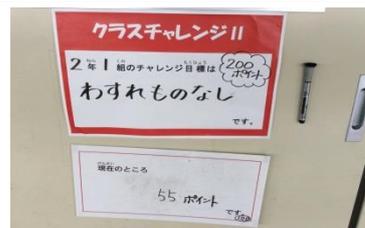


- (例) 「長縄跳び〇〇回」「チャイムスタート出来た授業〇〇回」「宿題忘れ0人〇〇回」「全員発表の授業〇〇回」「名札忘れ0人〇〇回」「遅刻0人〇〇回」など
- ※ 「くれチャレンジマッチ・スタジアム」や「ぴっかぴかトイレキャンペーン」「全校交通安全運動」についても取り組ませても良い。

- 3 褒賞について
- ア 褒賞については、達成した喜びを学級全体が感じられるような内容を示す。  
(例)「金曜日に出される宿題なし」「お楽しみ会の実施」「担任から全員へ表彰状」「臨時席替え」など
  - イ 期間中に達成した学級を、月一回の生活朝会で表彰する。
  - ウ 全学級達成した場合、校長より全校児童へ褒賞が贈られる。

## 取組の課題・創意工夫『キーワード：取組の見える化』

- ア 全学級の「チャレンジ目標」を集約した掲示板を下足場に設置し、他の学年の取組についても児童が知ることができるようにした。
- イ 取組の進捗状況が一目で分かるよう、「チャレンジ目標」だけでなく、「途中経過」についても掲示した。
- ウ 全ての学級が、教室入り口に「目標」「途中経過」を掲示した。自分の学級だけでなく、他の学級の様子も知ることで、お互い刺激し合えるようにした。
- エ 「チャレンジ目標」を達成した学級は、給食時間の放送を通じて学校全体に紹介した。さらに学級へ表彰状を与えたり、取組を集約した掲示物にシールを貼ったりした。
- オ 「クラスチャレンジ」の取組について、「学校だより」「掲示板」を通し、保護者や地域の方へ伝えた。



## 取組の成果（効果）『キーワード：望ましい中間的集団をつくる』

本校ではアセス（学校適応感尺度）を年2回実施している。その中でいじめられていないと感じている指標「非侵害的欲求」の学校平均は、平成27年7月の55.3に対し、直近の結果は、62.7と7ポイント以上の向上が見られた。学校全体の雰囲気、望ましい行動へ向かおうとしていることの表れであると考えている。

## 今後の展開『キーワード：取組の継続』

目標を達成した学級が、給食時の放送で紹介された際、大きな喜びの声が職員室まで伝わることもあり、児童がみんなで取り組み、達成することの喜びを感じていることがうかがえた。

今後は、この取組を定着させ、「目標を立てること」「それに向かってみんなで力を合わせ努力すること」が心地よく、当たり前と感じられるよう、継続していきたいと考えている。

## 他校へのアドバイス『キーワード：取組の再構成』

生徒指導の充実を目指して、新たな取組を増やすことも大切であるが、これまでの行事や取組を生徒指導の充実という視点で捉え直し、再構成し、取り組んでいくことは、取組の重点化、焦点化につながり、より有効なのではないかと考える。

学級で目標を立ててみんなで取り組んでいくことは、特に珍しく新しい取組ではない。しかし、それを学校全体で取り組み、経過、結果について公開していくことで、意欲を維持・向上していくことができた。学校全体で取り組むことが大きな力になることを実感できた取組であった。